慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『泊洒舎集』に於ける古典摂取の一側面
Sub Title	
Author	山本, 令子(Yamamoto, Reiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1997
Jtitle	三田國文 No.26 (1997. 9) ,p.8- 14
JaLC DOI	10.14991/002.19970900-0008
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970900-0008

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『泊洒舎集』に於ける古典摂取の一側面

山本　令子

一、はじめに

江戸派を代表する歌人の一人清水浜臣は、当代一流の考証学者としても知られる。その歌は、古今集調に新古今集調を加味した優雅なものであるが、本歌によりかかって実感性がない、作意が目につき余情に乏しいといった欠点が指摘されてきた。ただ、王朝の事物を好んで詠み込むといった特色も認められている様に、多くの物語や日記を書写・校正し、注釈書をものした彼ならではの詠作も見出だされるのではなかろうか。[1]

本稿に於いては、浜臣の歌藻の内、彼の死後嗣子光房によって編まれ、文政十二年に刊行された家集『泊洒舎集』を資料として、『源氏物語』を中心とする古典摂取という観点から検討を加えたい。[2] 古学派に於ける伊勢・古今・源氏取りが汎く認知された現在、浜臣の古典摂取の様相を指摘することが、果たしてどれだけの意義を有するかとの疑念も存しよう。然しながら、文人浜臣の全体像を捉えようと試みるならば、その実作に於ける古典作品との関わりに対する目配りも怠ってはならないと思うのである。

二、浜臣と『源氏物語』

まず、丸山季夫氏の『泊洒舎年譜』によって、浜臣の『源氏物語』に関する事績を挙げる。[3]

文化二年六月十七日　石川雅望に書翰を送り、源氏物語中の「けいめい」「けうそう」「いかう」「ふてふ」の語句の考証意見を申送る。七月十二日雅望より、返書来り、七月二十三日再度の意見を送る。（清石問答）なほ浜臣には、源氏物語名寄図考（文化十年刊）の著あり。其の旧蔵書には紫式部日記傍注（壷井義名撰）ありて、之に、栄華物語の初花巻、源氏物語梅ケ枝巻、枕草紙、古今集、夫木集、和訓栞其他よりの抄記を頭注す。（静）うたかたの日記にも源氏物語の筆致見ゆ。

文化八年正月　松平定信に召され、源氏物語を講じ、「みつはくむ」の考を草し奉る。これは白河少将にめされて、源氏物語講せしに、夕顔巻よめるをり、御問に答奉りて書たるなり。（答問雑稿）此時白かねを賜はる。

花さかぬするぬのの小草をりにあひてめぐみの露のかゝる

けふかな　（泊洒舎集巻七）

すなわち、石川雅望との『源氏』の語句の考証を巡る意見交換、松平定信に対する『源氏』進講の他、『源氏物語名寄図考』の著述が知られるのである。又、丸山氏が指摘された『紫式部日記傍注』への書き入れに見える『源氏』からの抄記、『うたかたの日記』への筆致の影響の他、『語林類葉』『皇朝喩林』に於いても『源氏』から多数の出典用例を引いている点が注目されよう。

『泊洒舎集』にも又、先掲の「花さかぬ…」の歌の他、数箇所の詞書に『源氏』の書名が見出だされる。

源氏物語に寄せて戀の歌詠みける中に、遇不逢戀

二度と結びもあへずかれにけり軒端の荻の露の契りは　（巻五戀歌）

源氏物語竟宴に紅梅大臣を得て

御園生の梅の盛りをいたづらになさじと急ぐ親心かな

同じく螢兵部卿宮

思ひあまり心の色を見えしかなはかなき蟲の影を頼みて

同じく六條御息所

人心ときはの色の変はらずば何か榊の忌みに籠もらむ

同じく弘徽殿大后

桐壷の名残り忘れぬ妬さをも須磨の恨みに思ひはるけぬ

同じく、右馬頭

つつまずももらす雨夜の睦語り我ぞくもりなく品は定めし

（以上五首、巻六雑歌上）

又、白地の扇を月と見せて、重なりたる山がたの扇かけにかけ、歌をば琵琶の撥に書きて添えつ、すべて橋姫の巻の心を思へり

これしても招きなるるやともすれば雲に重なる山の端の月　（巻七雑歌中）

この内、巻六の例は源氏物語竟宴にあたって、作中人物を題として詠じられたものであるが、螢兵部卿宮を詠んだ「思ひあまり…」の歌に就いては、堀田政敦によって主催され、文化十一年十一月に披講された『詠源氏物語和歌』「螢」巻の浜臣詠、

ほのかにも心の程をみせしがなはかなき中の影をたのみて　（一一三八）

との先後関係が問題となろう。[4]

又、巻七の例は前歌の詞書から、自家の扇合の折の作であることが知られるが、「橋姫」巻の宇治の大君と中君との挿話を趣向としたものであることは云うまでもない。

これらは各れも、詞書に『源氏物語』との関わりが明示されているが、『泊洒舎集』巻五には詞書等に言及がないものの、『源氏』を踏まえたとしか考えられない例が散見する。次節では、それらに就いて少しく検討を加えたい。

三、『泊洒舎集』巻五と『源氏物語』

先にも挙げた様に、『泊洒舎集』巻五戀歌の巻軸歌は「源氏物語に寄せて戀の歌詠みける中に、遇不逢戀」という詞書を有し、光源氏と軒端の荻とのただ一度の逢瀬を詠じたものであった。

これに対して、詞書には明示されないものの『源氏』を踏まえたと憶しい例が存する。

たとえば、「顯戀」題の六〇七番歌、

こりずまにみるめをかれば浪ゆする磯松がねと身はなりけり

は、『後撰集』・巻一二・恋四・八〇〇番歌、

あだに見え侍りける男に　　詠み人しらず

こりずまの浦の白浪立ち出でてよるほどもなくかへるばかりか

や、『大和物語』七九段

又、同じみこ（章明親王　※引用者注）に、同じ女（監の命婦　※同）、

こりずまの浦にかづかむうき海松は浪騒がしくありこそはせめ

などにも見える「こりずまの浦」を詠じたものであり、みるめを刈るという表現も又、『古今六帖』一八七〇・みるめ

白波は立ち騒ぐともこりずまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

などに見える様に、ごくありふれたものである。ただ、みるめを刈ったことによって磯松がねとなってしまったとする一首の仕立ては、朧月夜との密通事件を契機に須磨に流離することになった光源氏の姿を彷彿とさせるものであろう。「須磨」巻には、源氏が都の朧月夜尚侍に贈った歌として、

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかゞ思はむ

の一首を挙げるが、この歌を含む物語の筋立てそのものが、『泊洌舎集』六〇七番歌の背景として機能していると考えるのである。

又、六五四番歌、

人の女のいと幼かりけるを思ひ掛けて文遣はすとて

玉章をみつとばかりは答へてよまだ難波津は辿り得ずとも

は、『後撰集』巻一七・雑三・一二四四番歌（業平集七九／古今六帖一八〇八・ふね／伊勢物語六六段）、

身の憂へ侍りける時、摂津の国にまかりて住み始め侍りけるに　　業平朝臣

難波津を今日こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみわたる舟

などに見える、難波津の御津の浦を詠じているが、ここで想起されるのは「若紫」巻の次の様な叙述である。[3]

すなわち、北山から帰京した源氏は尼君あての消息の中に、若紫あての小さな結び文を入れて贈る。これに対して、尼君は、

ゆくての御事はなほざりにも思ひ給へなされしを、ふりはへさせ給へるに、聞こえさせむ方なくなむ。まだ難波津をだにはかゞしうつゞけ侍らざめれば、かひなくなむ。さても、

嵐吹くをのへの桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさいとゝうしろめたう。

と答えている。手習いの初歩として用いられる難波津の歌も未だ上手く続けられないので返事を差し上げさせることも出来ないというのである。源氏は重ねて消息を送り、若紫あてに、「かの御放ち書きなむなほ見たまへまほしき」として、「あさか山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ」の歌を同

封する。これは、やはり手習い歌として知られる浅香山の歌を踏まえたものであり、尼君は「汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき」と返歌するが、浜臣詠の幼女に懸想をして手紙を送るという設定や、たとえ難波津の歌も続けられないとしても返事が欲しいという歌意は、この「若紫」巻の条りに依拠したものではなかろうか。

同様に、「寄衣戀」題の六七八番歌、

忘られて年をふるきの皮衣なれ初めし世を今ぞ恨むる

は、末摘花の物語を念頭に置いたものの様に思われる。皮衣という素材は早く、『万葉集』巻九・雑歌・一六八六番歌（古今六帖三三一七・かはごろも／夫木抄一五五二七・かはころも）、

献二忍壁皇子一歌一首詠二仙人形一

とこしへに夏冬行けや皮衣扇放たぬ山に棲む人

や、『同集』巻一六・三九〇六番歌

越中国歌

伊夜彦　神のふもとに　今口らもか　鹿の臥すらむ　皮衣着て　角つきながら

などに詠じられており、『竹取物語』の阿部のみむらじに課せられた難題は火鼠の皮衣を探し求めてくることであった。又、『宇津保物語』「蔵開中」巻に於いても、俊蔭の家の集を進講するため、宮中に留め置かれた仲忠に女一宮から届けられた宿直物の内に、「六尺ばかりの黒貂の裘、綾の裏つけて、綿入れたる」が含まれていた。ただ、浜臣歌が皮衣を詠じた背景には、「末摘花」巻に於ける次の様な描写が想起されるのである。

着たまへるものどもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ。聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き袿重ねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着給へり。古体のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしき事、いともてはやされたり。されど、げにこの皮なうてはた寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心ぐるしと見給ふ。

この皮衣姿は源氏の眼に印象深く映ったものらしく、

世の常なるほどの、ことなる事なさならば、思ひ捨てゝもやみぬべきを、さだかに見たまひてのちは、中〳〵あはれにいみじくて、まめやかなるさまに常におとづれ給ふ。黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老い人どもの着るべきものゝたぐひ、かの翁のためまで、上下おぼしやりてたてまつり給ふ。

という条りでも「黒貂の皮ならぬ」という形で回想されている。浜臣歌一首の趣きは、皮衣の姫君末摘花を彷彿とさせるものではなかろうか。

更に、「絶後悔戀」題の六三〇番歌

性なさを懲らさむとてぞ背きにし思へば終のよすがなりしを

は、『源氏物語』「帚木」巻の雨夜の品定めに於ける左馬頭の体験談、指喰いの女の話を思わせる。女の嫉妬深さに手を焼いた左馬頭は、「かうあながちにしたがひおぢたる人なめり。いかで懲るばかりのわざしておどして、この方もすこしよろしくもなり、さがなさもやめむ」と思い、わざと薄情に振る舞ってみ

せるのであるが、そうこうする内に、女はひどく嘆き悲しんで亡くなってしまったのであった。語り手左馬頭の有り様は「いとあはれと思ひ出でたり」と記されるが、浜臣歌は、この挿話を思わせる様な仕立てになっている。

以上、見て来た様に『泊洒舎集』巻五には、詞書に言及がないものの、明らかに『源氏物語』を意識したと思われる表現・設定の歌が収められている。そして、このことは『源氏物語』にとどまらず、彼の古典摂取の在り方の問題として考えることが出来る様に思われるのである。

四、『泊洒舎集』巻五と古典作品

巻五の巻軸歌が、軒端の荻との恋を詠じたものであることは、再三述べてきたが、その直前に配された二首には、「寄催馬楽」との詞書が付されている。

其の駒に朝くらおきて近江路を妹が門まで辿り来にけり
（六九〇）

人心縹の帯の中絶えて今は悔いする身とぞ成りぬる
（六九一）

この内、六九〇番歌が単に歌謡の曲名「其駒」「朝倉」「近江路」「妹が門」を織り込むに留まるのに対して、六九一番歌は「石川」の歌詞、「石川の　高麗人に　帯を取られて　からき悔する　いかなる　いかなる帯ぞ　縹の帯の　中はたいれるか　かやるか　あやるか　中はいれたるか」を踏まえたものとなっている。[6]

又、「山家戀」題の六三九番歌、

うつほ木にあまたの年を住みわびぬかりそめ臥しの人を待つとて

は、校註國歌大系の頭注が、「宇津保物語仲忠の母を思うて詠じた。」と指摘する様に、兼雅とのかりそめ臥しの契りの後、足掛け七年もの歳月を北山のうつほで暮らした俊蔭女の姿を詠じたものと考えられる。浜臣の『宇津保』に対する造詣の深さは、その注釈『宇津保物語考証』に端的に顕れている。

更に、「寄鏡戀」題の六八三番歌、

ひも鏡われて契りし中なれば二度結ぶ折もありなむ

は、『唐物語』第一〇話に見える、鏡の半片を頼りに再会を果たした徳言と陳氏の故事に拠ったものであろう。『唐物語』文化六年版本を校刊し、これと合冊の形で、自身の注解『唐物語提要』を世に問うた浜臣が、その一話を自詠に用いたと見做したい。当該説話は既に、

唐人の妹と分かちしから鏡われても君に逢はむとぞ思ふ
（為忠家後度百首六六一・寄鏡恋・為経）

元享元年九月廿六日、亀山殿にてうへのをのこども題を探りて歌つかうまつりける次に、同じ心を詠ませ給うける　後宇多院御製

たなばたはわれて又逢ふ鏡かと秋の七日の月や見るらむ
（新千載集三三一・巻四・秋上）

市人のかへし鏡のわれてだに逢ふ例しある世をよ頼まむ
（永享百首八五五・寄鏡恋・持基）

などと詠じられているが、浜臣詠はこの故事を踏まえると共に『万葉集』にも見える「ひも鏡」の語を用いて一首を仕立てて

いる。

すなわち、右に挙げた諸例からは、浜臣が『源氏』に限らず古典作品の表現と設定とを借りて、自己の和歌世界の構築を試みていることが窺われるのである。

五、おわりに

以上、見てきた様に『泊洒舎集』巻五には『源氏物語』を中心とする古典作品を積極的に取り込む姿勢が窺われる。そして、それは「物語・漢詩文・故事などの表現や内容の一部を取り用いることによって、一首の背後に物語や詩文の世界を揺曳させ、表現・情調の重層化をはかろうとする作歌技法」[7]と定義されるところの「本説取」の域に留まらないものであった様に思われるのである。或る題を詠じるために、古典作品を利用するというよりはむしろ、古典作品から題を設定し、作品世界の拡がりの中に一首を仕立てる営みであったのではなかろうか。とすれば、ここで、参照されるべきは、『うけらが花』巻五恋歌の巻末歌群などである様に思われるのである。

後撰集の、木の葉散る山の下水埋れて流れもやらぬものをこそ思へ、といふ歌の返しの心を

おぼろげの水の流れやいささめに散る木の葉にも淀むなるらむ　（一一六四）

同じくあだに見え侍りける男に、こりずまの浦の白浪立出でて見る程もなくかへるばかりぞ、とある歌の返しの心を

須磨の浦の松の嵐のはやければ淀みもやらでかへる浪かな　（一一六五）

同じく、今はてふ心つくばの山見れば梢よりこそ色変はりけれ、といふ歌の返しの心を

筑波峰のしづくてふ名は涙にて変はるは袖の色にざりける　（一一六六）

後拾遺集の、忍びつつ止みなむよりは思ふことありけるとだに人に知らせむ、といふ歌の返しの心を

山の井のやまむよりはと聞くからに浅き心を汲みてこそ知れ　（一一六七）

古歌一首或いはその一部を題とすること、いわゆる仮名句題は、この時代何も新しいことではない。ただ、浜臣同様、江戸派を代表する歌人であり、かつ考証学者としても優れた業績を遺している千蔭が、古歌の返しの心を詠じるという試みに取り組んでいることは注目に値しよう。そこには、古典世界の内に身を置き、古典世界に没入しようとする姿勢が共通して看取されるのではなかろうか。

確かに、浜臣の歌には、従来指摘されてきた如き欠陥が認められる。然しながら、本稿で見て来た様な、古典作品を巧みにかつ積極的に摂取した詠歌は該博な知識と教養とに裏打ちされた、彼ならではの作とも云えよう。浜臣の和歌を考えていくにあたっては、彼の遺した膨大な蔵書への書き入れや注釈書類との照らし合わせが不可欠であり、今後の課題として、尚考えていきたい。

注

和歌の引用に就いては、特に断わりのない限り、『新編国歌大観』に拠ったが、私に表記を改めた箇所がある。

(1) 浜臣の歌風に就いて言及されたものとしては、佐々木信綱氏『近世和歌史』(博文館・大正十二年／佐々木信綱歌学著作覆刻選第四巻・本の友社・平成六年)、山岸徳平氏「泊洒舎集」解題(『近代諸家集　四』・校註國歌大系第十八巻・國民圖書・昭和四年)、佐藤宗亮氏「清水浜臣の歌」(窪田空穂・松村英一氏編著『徳川時代和歌の研究』・立命館出版部・昭和八年)、辻森秀英氏『近世後期歌壇の研究』(桜楓社・昭和五十三年)、『日本古典文学大辞典』「泊洒舎集」の項(梅谷文夫氏執筆・岩波書店・昭和五十九年)、『和歌大辞典』「泊洒舎集」の項(辻森秀英氏執筆・明治書院・昭和六十一年)などがある。

(2) 以下、「泊洒舎集」の引用は、前掲山岸徳平氏校註『近代諸家集　四』に拠ったが、私に歌番号を付した他、表記を改めた箇所がある。

(3) 丸山季夫氏『泊洒舎年譜』(私家版・昭和三十九年)。

(4) 引用は、松野陽一・上野洋三氏校注『近世歌文集上』(新日本古典文学大系六十七・岩波書店・一九九六年)に拠った。

(5) 以下、「源氏物語」の引用は、柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎氏校注『源氏物語一』(新日本古典文学大系十九・岩波書店・一九九三年)に拠った。

(6) 引用は、土橋寛・小西甚一氏校注『古代歌謡集』(日本古典文学大系三・岩波書店・昭和三十二年)に拠った。

(7) 前掲『和歌大辞典』「本説」の項(寺田純子氏執筆)。

(やまもと　れいこ)